

---

# 今日から「お」のつく自営業?

Ponkichi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

今日から「お」のつく自営業？

### 【Nコード】

N5339Y

### 【作者名】

Ponkichi

### 【あらすじ】

高校入学当日、家を出てわずか2歩で不慮の事故によって死んでしまう。そして次に目が覚めたとき目の前に天使がいた。その天使の気まぐれで陰陽師に転生させられてしまう。

処女作なので多少稚拙なところもありますが楽しんで読んで頂けたら幸いです。感想もお待ちします。

## 序章（前書き）

処女作なので多少稚拙な部分もありますが楽しんで読んで頂けたら幸いです。よろしくお願ひします！

## 序章

産まれて15回目の春休み、俺は明日から始まる高校生活をおもいつきり楽しもつと決意し眠りについた……。

「あっさだー！ー！！！」

珍しく朝6時に起きてご飯を食べてシャワーを浴びて、そしていつも以上に丁寧に髪をセットして準備完了！

「いってきまーす！」

家を出てわずか2歩。

それは酷くゆっくりとみえた。

こちらに突っ込んでくる大型トラック、響き渡るブレーキ音。

ドーンッ！！！！

その瞬間俺は宙を舞っていた。そして次に目が覚めたとき俺は雲の上に寝ていた。

「ここはどこだ？確か俺はトラックにふっ飛ばされて……ってえー！て事は俺は死んだのか？傷は、血は？じゃあここは天国？」

それは、パニクる俺にいきなり上から目線の口調をあびせてきた。

「それは少し違っわ小童めっ！」

うわー、なんかいかにも天使ですってというような面倒くさそうな奴が出て来たー。

こういう奴には関わらないに限る。目を合わせない様にして逃げた方が良いな。

「なんじゃ、そのあからさまに嫌そうな顔は、ここは不運によって命を落とした者を転生させる場所じゃ。お主はどんなところに転生したいんじゃ？」

まあ気まぐれで選ばれたんじゃがな。

1、魔法使いや騎士となってモンスター

と闘う世界

2、陰陽師になって妖や悪霊たちと闘う世界

3、今まで通りの世界だけど人間以外の生物

になって生きる

さあどれがいい？」

まともな選択肢が・・・無い。なんで今まで通りの世界を人間として生きるって言う選択肢がないんだ。

「そんなのきまっておろう。そんな普通な人生つまらんでわないか！」

心の中読まれたー！ってかその人生を生きるのは俺だ。

「その位ぞうさもないわ！さあ早く選ぶのじゃー！」

3は、もし魚とか虫とかになったら嫌だし、  
1は、なんかありきたり過ぎるし…。

「じゃあ、2でお願いします」

「本当にいいんじゃない？一度決めると変えられぬぞ？」

・・・本当にいいのか俺・・・？

「ああ、もう、うじうじおって面倒くさいのぉ、もう行ってしま  
え。さらばじゃー！」

ええー！！！！心の準備が！その瞬間足元の雲が消えて地上へおちて  
いった。

## 序章（後書き）

このような作品を読んでいただきありがとうございました。これからもよろしくお願ひします！感想をお待ちします。

## 入学式は波乱万丈？

転生してから6年、俺は小学生になった。

今の名前は霧雨智樹<sup>きりさめ ともき</sup>。

入学式にトラウマがある俺はあまり気乗りはし無かったが、学校へ行った。

無事に学校へも着いたし学校でもこれと言ってなにもなかった…ただ一つ陰陽師に転生したからなのか学校にはこんなにも居るのかと言う位…見える。

そして、今人生最大の危機にひんしている。視るからに悪霊っぽいのが4 5体、鬼の形相で俺を追ってくる。(いつもより多い)まあ、生まれ持った才能なのか、その辺にいるような大抵の悪霊は約半径1m以内には近づけない。…けど、怖いから逃げる！

「ふうー、セーフ何とか逃げ切れた」

やっと家に帰ってこれた。

家の敷地内には入って来られないのだ。流石、陰陽師の家だ。

まあ家が寺だと言うのも関係していりのかもれない。しかも、家は陰陽師としては日本で3大陰陽師に入るらしい。流派の名前もそれっぽい。

じゃあ、流派の名前の紹介と俺の現状も紹介しよう。

龍天流尚禅寺式陰陽術35代目正統継承者

霧雨智樹だ。

そう正統継承者つまり、次期党首なのだ。

故に闘いからは逃げられない訳だ。

親父が俺に悪霊に対して何も処置をしないのはそう言う理由もあるわけだ。



「智樹帰ってきたのか！」

この人は俺の父親の霧雨龍夫。つまり現党首だ。別に昼間から家に居るのは無職な訳では無い、寺の住職もしているだけだ。

「うん！」

俺はあくまで小学生らしく返事をした。

「学校はどうだった？楽しかったか？」

「うん！」

あくまで小学生らしくだ！

「そうかそうか、それは良かったな。話しは変わるがな、智樹も小学生になったんだ、そろそろ修行を始めてみないか？」

俺の気持ちは転生する前とは違いこの時を待ち侘びていた。

まあぶっちゃけ、転生してしまったものはどうしようも無いので思いつ切り楽しもうと開き直っただけなのだが。

それに、悪霊どもから逃げっ放しもしゃくだ。

「うん！修行やりたい！」

「いいんだな？相手は悪霊だけじゃないんだぞ、妖も相手にしなければならんだぞ！」

そんなことは分かっているぞ。

むしろ、望むところだ！

「うん！それでも修行したい」

「じゃあ、今度の土日から修行開始だ。あと修行は、土日だけだから平日は友達と遊んでて良いゾ」

「ありがとう、お父さん」

フツ、これで俺も陰陽師だぜ！

## 入学式は波乱万丈？（後書き）

こんな作品を読んでいただきありがとうございます。続きも読んでいただくと幸いです！！！！

感想がユーザーのみになってすみませんでした。感想をお待ちしています！

## 党首の背中！

早速、修行：と行きたいが今日はまだ火曜日だ。

ああ〜早く土曜日来ないかな〜。

そう言えば、学校で友達が出来たんだ。先にそつちを紹介しておこう。

俺の友達は今のところ順に、佐藤拓馬、水沢夏海、岩崎健、濱岡紀子の4人だ。全員1年生だ。

まず最初に紹介したいのは、水沢夏海だ。とりあえず、第一印象は可愛いってことだ。あと、性格は活発で思いやりがある良い子だ。多分、8年後良い意味で化けるな。

次に、佐藤拓馬。こいつは俺らの中でリーダー的存在で、典型的なガキ大将だ。

次は、岩崎健。こいつは頭が小1にしては、なかなか切れるヤツだ。最後は、濱岡紀子だな。こいつは、何と云うか：顔は可愛い方なんだが、少し根暗と云うか・・・そう物静かなんだ：うん。

因みに俺は、そこそこイケメンで、クラスのムードメーカーといったところだ。

この顔に産まれて来てよかったー！  
入学して少しして告白もされました。まあ〜ふったけどな！俺は夏海以外の奴は興味無し！

そして今はみんなで学校の近くの公園にきている。

「とーもき君！かくれんぼしよう」

は〜い。もちろんやります！貴女がしたい事＝俺のしたい事ですから！

「智樹はサッカーしたいよな！」

拓馬「調子に乗ってんじゃねー！俺はかくれんぼがしたいんだー！」

「いや、僕はかくれんぼがいいな」

「まあ、智樹がそう言うならそうするか」

ふつつつ、見たかこれがムードメーカーの力だぜ！

そして4時過ぎまで遊んで帰った。まあみんな小1だし妥当なところだろ。

「ただいまー！お父さん。今日は友達と公園で遊んで来たんだよ」

とりあえず、親父は心配性なので今日の報告をしとく。

「そうか、それは良かったな。イジメとかされてないか？大丈夫か？」

「うん！大丈夫だよ。ありがとうお父さん」

「智樹、やっぱりお前は良い子だな」（涙）

やっぱり親バカは扱いが楽でいいぜ。

「お父さん、僕、お父さんのおんみょうじゅつ見たいな」

「え、困ったな。どうしようかな」

ふっ、無邪気な俺の可愛いさでイチコロさ  
な眼差しビーム

無垢な俺の純粹

くビーム発射中

「しょうがないな、特別だぞ」

ふっ、楽勝だぜ。

「まず最初に、陰陽術ってのは種類があるんだ。それは大きく分けて、結界術・紙鬼神術・使鬼神術の3つがある。どんな術かと言うと、

#### 結界術

自分を包めば相手からの攻撃を防御出来るし、相手を包めば結界の中に閉じ込める事が出来る。術者の強さによって結界の強さも変わる。

また、ある程度極めた者は光の屈折を結界によって変えれば姿を見え無くする事も出来る。

#### 紙鬼神術

紙に呪を書いて使う。霊力をこめるか、霊を憑依させて使う。霊力をこめる場合は従わせる必要は無いが意思がないので自由に動く様にするのは大変だ。

逆に、憑依させる場合は霊を従わせる必要があるが、低級霊を使えばある程度簡単に出来る。

#### 使鬼神術

霊や神獣、妖などと契約して使役出来るようになる。

契約の仕方は、まず召喚するか探すかして使役したいモノを見つけ  
る。そして、倒して（滅してはいけない）従わせるか利害の一致に  
より契約出来る。

ただし、倒して従わせているモノは自分の心にブレがあると契約は  
破られ暴れだす。

つと、まあこんなところだ」

なるほど、どうせなら強い使鬼神がいいな。

親父の使鬼神はどんな奴だろうか？

よし、純粹ビーム発射

「お父さんの使鬼神見たいな。ダメ？」

「わかった。可愛い息子の頼みならお父さん一肌脱いじゃうぞー」

よっしゃー！成功したぜ！

「しつかり、見てるんだぞ。あつ言い忘れてたけど、霊や霊獣、妖、  
何にしても霊体のときはいいが、具現化させる時は血を捧げなけれ  
ばいけないからな」

親父は他の人にみられないように姿を隠す結界を張り、親指の先を  
嚙んで呪文を詠唱した。

「我に忠誠を誓いし僕契約に従い我に仇なす者を葬れ！  
死をも司りし地獄の番犬 ケルベロス！！！」

その瞬間、目の前の空間が割れ黒い炎と共に5メートルは有ろうか

と言つ黒い犬が現れた。



党首の背中！（後書き）

このような作品を読んだけいただきありがとうございます。感想を  
お待ちしております！

続きも楽しんで読んでいただけると幸いです。

## 党首の背中！（2）

「死をも司りし地獄の番犬 ケルベロス！！！」

その瞬間、目の前の空間が割れ黒い炎と共に5mは有ろうかと言う犬が現れた！

しかも、頭が3つある。カッコいい！！！！

日本3大陰陽師の現党首と言うのは分かってはいたが、これ程までとは。

しかも、ケルベロスなんて伝説級のモノを使鬼神にしているなんていつもの親バカな親父とはまるで別人だった。

ほとんど素人の俺でもこの妖気の凄さがわかる。気を抜いたら呑まれそうな程の妖気と殺気だ。

これでも少しも力を出していないのだろう。

『この小僧がお前の息子か』

ケルベロスは想像どりの低く重厚な声だった。声だけでも俺の体を硬直させる程だ。

「そつだ。なかなか良いものを持っているだろう？」

『ふむ。何か強大な力を感じるな。ただ、お前とは異質な力だ。』

もしかして俺って才能あり？でも、親父とは異質な力ってのは気になるな。

「強大な力とはどんなものだ」

そう、そこが知りたいんだ。

『今はまだ分からん。そして、この力を扱い切るのはお前でも難しいだろうな』

なんだよそれ。

親父でも扱い切れるか分からないなんて一体どんな力なんだ！

「わかった。ありがとう、もう戻っていいぞ」

『では、また会おう小僧！』

「僕は小僧じゃ無い、霧雨智樹だ」

『ふっ、覚えておこう智樹さらばだ！』

ケルベロスは竜巻を纏い消えた！ただ、おれは竜巻よりもケルベロスに名前を覚えてもらったことの方が嬉しかった。

「どうだ智樹、お父さんの使鬼神はカツコいいだろう？」

この親父からは考えられ無い位かつこよかった！

しかし、言葉とは裏腹に親父は少し疲れていた。使鬼神術は思いのほか疲れるらしい。

「うん！お父さんカツコいい！」

俺はあ・く・ま・で！子どもらしくいった。

「そくだろつ？お父さんカッコいいだろつ！」

本当にさっきの親父と同一人物か疑う位デレデレになっている……。土曜日よこい早く修行だ！そして、早く超カッコいい使鬼神を手に入れるんだ！

—————

しかし、私にも扱えない程の力とは、一体。智樹にはどれほどの力が眠っているというのだ。

まさか…いや、そんなはずは……。

党首の背中！(2) (後書き)

このような稚拙な作品を読んで頂きありがとうございます！これからも応援のほどよろしくお願いします。

## 修行開始？

今日は待ちに待った修行の日。

希望を膨らませていた…だが現実はそんなに甘くはなかった。

「智樹、修行の時間だぞ？」

俺が楽しみにしていたこともあり親父はとても楽しそうに俺を起こしに来た。俺は寝ぼけながら時計をみて驚いた。まだ、朝の4時半だった。

「お父さんまだ、眠いよ〜」

俺は飛び切り可愛く言った。

だが息子との修行を楽しみにしていた親父には通じなかった。

「何を言っているんだ、修行は朝の澄み切った空気の中でやるから良いんだぞ！さあ早く起きるんだ」

俺は諦めて布団から出た。…まだ眠い。今すぐ寝ると言われれば何時でも寝れる。

「今日は基本的な霊力操作の修行だ！まずは霊力操作の種類を説明しよう。霊力操作には2種類あるんだ。

まず1つ目は、霊力を高める事。2つ目は、霊力を物理的な力に変換する事。

## 霊力を高める

霊力操作の基本中の基本で、どんな術にしても、物理的な力に変換するにしてもこれが出来なければ何も出来ない。やり方は集中する、ただそれだけだ。

霊力を物理的な力に変換する

これは、いわゆる衝撃波の様なものだ。また、結界術にも通じるものだ。

今日は特に霊力を高めることをやってみよう。」

「えー、使鬼神術はー？」

俺は早く使鬼神術をやりたいんだ！

「まだ、早いからダ〜メ！力も無いのにそんなことをしたら霊力を全部持っていかれて死ぬぞ」

マジで？ヤバイじゃん。なら仕方ない転生して6年でまた死にたくないし基本からやるか…。

「まず、やり方を説明しよう。一番大事なのはイメージだ。体の中から力を膨らませるイメージだ。」

そして、ある程度膨らんだら体の外に出して体に纏うイメージだ。」

簡単じゃんそれ位。

「じゃあ、手本を見せるぞ。はあー」

親父が息を吐いた。それとともに親父の周りを取り巻く空気が霊気を帯びていった。

「やってみる」

俺は親父がやった様に目をつむった。

そして、体の中から力を膨らませるイメージをした。

・・・けど、いつこうに膨らんだ感じがして来ない。再度イメージを固めたがやはり駄目だった。

「お父さん、出来ないよ」

「はっはっは！そんなにすぐには出来ないよ。今月中に出来たとしても早い方だよ」

クッソ〜！今日中に何としても出来るようになってやる！

もう1回だ。体の中から膨らませる、体の中から膨らませる…

……ふわっ！

んっ！今なにか体の中で膨らみかけたような気が。  
よしっ、もう1回だ。

…ドクンッ！

！…！やっぱり何か膨らみかけているのか？

「まさか…智樹誰かに教わったのか？」

親父のこの反応はやはりできかけているんだ！

「誰にも教わって無いよ」



「お姉ちゃんにもか？」

言い忘れていたが俺には姉がいる。

今年から中学に上がって部活に励んでいるため今日は修行は出来な  
いらしい。

姉の力は生まれつき強く、産まれた直後の産声で病院中の悪霊を追  
い払ったくらいだ。

実際喧嘩も男より強い…。

そして、なかなかの美人だ。

「うん、誰にも教えてもらって無いよ」

「そうか、スゴいな。智樹は。お姉ちゃんはここまで出来るように  
なるまで2週間かかったぞ！

でも、歴代の陰陽師の中で最も強い力を持っていたと言われる初代  
龍天流陰陽師の昇華院龍天も1日でしかも、5才で出来たらしい。」

流石初代！でも、そうか、やっぱり俺って才能あるのかも？

再度挑戦…

ドクン！！！！

さっきより大きくなっている！

でも、これを絶えず膨らませながら体の外に纏わなければいけ無い。

気が付けば俺は夕方まで霊力を高める修行をしていた。

だが、結局出来たのは少し膨らませて保つぐらいだった。

でも、親父から言わせると驚異的なスピードらしいが。次の日も夕方までしていたが、たいして変わりはなかった。

――――

やはり、あの成長スピードは普通では無い。まずあり得無いスピードだ。

やはり…でもそれ以外考えられない。

そして、数ヶ月が立ち俺は霊力を高める修行はマスターした…と思っていた。だが、ほんの第一段階に過ぎなかった。

「次の修行は、これを瞬時にする修行だ！前はゆっくり息を吐いていたが短く吐くんだ。行くぞッ！はっ！」

親父の周りの空気が霊気を帯びた。だが、前と違うのは、前はじわじわ変わる感じだったけど、今は一気に変わった。

ようするに、戦うときに隙が出来にくいと言うことだ。

しかし、ただ高めるだけで無く体の周りに纏いどこまで高めるか瞬時に調節しなければならぬのだ。

しかし、今は夏休みだ。

一週間で立ち毎日、朝の4時半から夕方までしていたおかげで、何と無くだが出来るようになった。

やはり、驚異的なスピードらしい。あとは、夏休みが終わるまでに

仕上げるだけだ。

## 修行開始？（後書き）

このような作品を読んで下さりありがとうございます！感想もお待ちしています。

次からは多少の年月が流れます。分かりにくい文にならないように気をつけてがんばります。

## 卒業式は大波乱？（前書き）

更新遅れてすみませんでした。テストが近いのであまり書けません  
が、がんばります！

## 卒業式は大波乱？

「智樹、早く！卒業式で遅刻したら洒落になんないわよ」

そう、今日は小学校の卒業式なのだ…がしかし、あと15分で遅刻だ。

そして、小学校まで走って12分…そうとてつも無くやばいのだ。だけど、俺的には夏海が家まで迎えに来てくれて一緒に登校出来れば遅刻してもいいんだけどな。

そう言えば、最近変な夢をみたんだけど、その夢の中には紫色をした奴と、緑色をした妖のような、神獣のような奴が2匹出て来るんだ。

そして、俺はそいつ等にこう言われるんだ、

『お前は何を願う。お前は何を欲し何を求む』

ってさ、だから俺はこう答えた、

「俺は誰にも負けない強い力が欲しい！」

『何故だ？』

そんなもの理由は1つしかないだろう。

「どんな妖をも倒すためだ！」

『ふっ、お前のその考えが変わった時我らはお前に力をかそう。では、その時まで、さらばだ』

って感じで夢から覚めるんだ。

「おはよー夏海！」

ヤバイセーラー服姿マジ可愛い〜！ってそんな事を言っている暇はないんだ。

「おはよーじゃ無いわよ。早く行こっ！」

-----

そんなこんなで滑り込みセーフ。

先生にたっぷりしぼられました。はい。

ああ、これで小学校生活も終わりか〜と思いつつながら特に感動も無く卒業式終〜了〜！

やっぱり女子は号泣。

なんで女子ってここの言つとき泣くんだろうな。

どうせ皆同じ中学校なのにな。

俺の家は母親しかこなかった。親父は仕事だ。別にいいんだが。仕事が終わるのは卒業式が終わる少し前だ。

ひとしきり、記念撮影とかをやって母親は買い物があるとかで、俺は一人で帰ることに。

家の（寺）石段を上がるうとしたときだった！

ピリッ！……！

家の方から邪気を感じた。しかも、とてつも無く強大な。とりあえず、紙鬼神で様子を探るか。ん、いつ使える様になったのかって？

まあ、6年間もあつたんだ、それ位は出来るさ。

使鬼神術はやり方しか知らないが…。

紙鬼神を媒体にして様子を見た、

！！！！つ親父が妖に襲われている！

ヤバい今は姉貴も居ない。とりあえず行くしか…無い。

「父さん！大丈夫ツ？」

「来るな！智樹！」

状況を見て愕然とした。親父が押されてる。

「ぐっ！父さんが結界で抑えている間に逃げる！長くはもたん！」

「だけど！」

親父を置いていくわけにはいかない。

今置いていったら確実に親父は殺られる！

「はっ、早く…早く逃げる！」

「ぐはあ！結界が！」



親父の結界が破られて、それは、酷くゆっくりとみえた、妖が親父に襲いかかる。

「やめるーーーーー！」

そして、俺は紫と緑の眩い光に包まれた！

## 卒業式は大波乱？（後書き）

このような作品を読んで下さりありがとうございました！感想もお待ちしています。

具体的に要点を指摘して頂ければ参考にさせていただきますが、悪口や喧嘩腰の感想はご遠慮下さい。

## 設定詳細（前書き）

久しぶりの投稿ですが、次の金曜日くらいまでは投稿出来無いかもです。

## 設定詳細

設定の詳細についての説明をします。（作者自身がこのままだときつい…）

告白の件については、改稿したのでそちらを…

紙鬼神術については、紙の大きさはだいたい幅はレシート位で、長さは、用途によって変わりますが、基本的には10～15cm位です。

紙に書いつある呪については、自分の生唾か血を混ぜた墨を使って書かなければいけません。

まあ、智樹は例外なので…ゴホンゴホン、それはさておき、紙鬼神術についてはこれ位です。

次に、使鬼神術についてです。

まず最初に、契約についてです。契約は召喚陣を（契約用）地面か床に描き呼び出す。（召喚陣は家系などで異なる）

また、契約したいモノがいる場所か、封印されている場所まで行き契約する。（ケルベロスなどの人間界以外にいるモノは前者を用いる）

いずれも、戦って勝利して無理矢理契約させるか、利害の一致又は妖等の気まぐれで契約するかです。（無理矢理契約しても契約さえすれば絶対服従する）

召喚の仕方については2つあります。

1つ目は、親父がやったように召喚呪文を詠唱して呼び出す方法。詠唱する呪文は自分で好きな様に決められます。（そのときの気分で変えられる）

けど、必ず何かしらの詠唱は必要で、また、ある程度召喚するモノ

に関係がある言葉ではなければならぬ。

例：地獄の番犬　　などです。

2つ目は、召喚陣を（召喚用）地面か床に描き呼び出す方法です。

この方法は召喚陣を描くぶん時間はかかりますが、多少は難易度が下がります。

けど、契約して呼び出せるだけでも中の上くらいの中級者です。

説明はこれ位です。

何か他に質問があれば、書いて頂ければそのつど…。

最後になりましたが、これからもこんな稚拙な作品ですがよろしく  
お願いします！

## 設定詳細（後書き）

感想をお待ちしています。ダメ出し、アドバイスなども大歓迎です。  
よろしくお願ひします！

## 力の意味

俺は紫と緑の眩い光に包まれた…。

「……………うっ、ここはどこだ？確か俺は…寺の境内にいて親父が妖に襲われてて…」

俺は周りを見渡したが、真っ暗で何も見えない。一筋の光も無い完全な闇。

『智樹：智樹、こっちです』

後ろから声が女の声が聞こえて振り向いてみると、闇の中にぼうつと紫の炎と緑の炎が並んで浮かんでいた。

『智樹』

俺を呼んでいた声の主は緑の炎らしい。

「何故、俺の名前を知っている。ここはどこだ？」

俺は警戒しつつ聞いてみた。しかし、こいつらからは怪しい気配は感じない。

『安心して下さい。ここは、彼方のいた次元とは別の次元です。父上殿もご無事です。』

「本当…なのか？」

俺はこいつ等を信用してもいいのか？

『はい。本当です。でも、あの妖を倒したわけではありません。あくまで、時間の流れる速さが違うだけです』

緑の炎の話しを聞いた結果、ここで数時間話していたとしても、もとの次元では、0.1秒程しかたっていないらしい。

『あまりここに人間が長居をしてはいけません。ここは人間が入り込んではいけない領域、神の領域に近い次元です』

何故、俺がそんなところに？

『では、お前にもう一度問おう』

突然、今まで沈黙を貫いていた紫の炎が沈黙を破った。

…俺はこの声に聞き覚えがある。…夢に出て来た紫の神獣の声だ。

『智樹よ、お前は何を望む。お前は何を欲し何を求む』

今なら俺はこいつの言葉の意味がわかる。

「俺は…俺は、力が欲しい！」

『何故だ？何故、そんなにも力を求める』



「俺は、俺の大切な人たちを守りたい。そのために、力が欲しい」

俺は、もう嫌なんだ。

俺の大切な人たちを俺のせいであいたくは無いんだ！

俺は忘れていた、力は敵を倒すものじゃ無い、敵から大切な人たちを守るためのものだ！

『…正解だ。力とは大切な者を守るためのものだ。』

しかし、それで良いのか、この力を使えば世界を救えるやもしれぬぞ。

お前は助けられるかもしれぬ者を見捨てるのか？』

確かに、こいつ等の力があれば多くの者を助けられるかもしれない、けれども、

「1人の人間が世界を、全ての者を助けるなんてことは不可能だ。

そんなものはただの傲慢だ！

だから、俺は自分のできる限りのことをするだけだ！」

これで力になつてもらえずとも別にいい。

俺は俺にできることをするだけだ。

『…ふつ、合格だ。しかし、1つだけ肝に命じておけ。大切な者を

守るには自分の命がなくてはならないということをや』

そうか、人の命を守ると言うのは、自分の命を守ることなのか。

『では、契約を』

俺は靈力を高め、契約の呪文を唱えた。

「我に忠誠を誓いし神獣たちよ、我と契りをかわせ！」

神獣たちが胸に吸い込まれた。そして、闇が吹き飛んだ。

『お前に我等が扱えるかな？』

## 力の意味（後書き）

このような作品ですが、楽しんで読んで頂けたら幸いです。感想をお待ちします。

## 正統継承者

『お前に我等が扱えるかな？』

親父と妖との距離はおよそ10m。

親父には、とつさに張った弱い結界が1つだけ。

2 3発の攻撃で破れるくらいの強度。

妖の体長はおよそ3m。鋭い牙と爪。見た目は赤く、獅子に似ている。

俺と親父の距離は20m。

(早く我等を呼び出せ！親父が死ぬぞ！)

ああ、そうだった。

落ち着け…俺、落ち着け！

契約した今ならこいつ等が何なのかわかる。

「汝、月読に仕えし闇夜の守護神、紫月！

汝、天照大神に仕えし光の守護神、緑陽！

我に守護の力をかせ！」

いきなり紫の炎と緑の炎が胸から飛び出して紫の炎…紫月が一迅の風の如く駆けていった。

間に合えー！

親父の体を妖の爪が切り裂く瞬間、

風の様き紫月が妖の首元に喰らい付き、そのまま5mくらい放り投げた。

いきなり横から来た紫月に妖は反応しきれずにあっさり過ぎるくら

い綺麗に放物線を描いて宙を舞った。

『ふっ、お前如きの低級な妖に好き勝手にはやらせねえよ！  
しっかし、シヤバに出たのは何百年ぶりだ？』

紫月はおよそ5mくらいの紫色の狼だった。

ケルベロスと同じくらいな大きさで

少しケルベロスよりは細い体つきだ。

例えるなら、ケルベロスが土佐犬で紫月が狼って感じだ。

親父をあれだけ押ししていた妖を前にしても、紫月は余裕の笑みを浮かべ楽しそうだ。

妖と紫月とでは格が違い過ぎる！

そして…カッコいい！

しかし…

『おい！34代目、早くお前の使鬼神も出せ！』

いくら、召喚出来るくらいの力があるとしても、流石に修業を始めて6年目の霊力なんていつまでもつか俺自身分らない。

「ああ、 我に仇名す者を葬れ、死をも司りし地獄の番犬  
ケルベロス！」

おそらく、親父は使鬼神を召喚する間もなくいきなり襲われたんだろっ。

しかし、ケルベロスを召喚してしまえば勝ったも同然だ。

紫月と同じく、格が違い過ぎる！

『やっとお呼びかな？ずいぶんとやられたものだな龍夫よ』

やはりこちらにも余裕の表情で楽しんでいる。

しかし、いつ見てもケルベロスはカッコいいな。

完全にこちらの形成逆転だ。

「うるさい！早くあいつをやれ！」

親父も大分やられてあたので召喚するだけの霊力などそんなに残っていないらしく、キツそうだ。

『ふっ、あんな雑魚、造作もないわ！

冥土の土産に良い物を見せてやろう。

喰らえ 断頭 ！』

その巨体からは想像出来ないほどの俊敏な動きでその鉋のような爪を使い文字通り頭を切断した。

溢れる鮮血。

あれだけ強大な妖気が一瞬で散った。

『グガアアアオ、何故だ…何故、私が死ななければならぬのだあ  
ー！』

体はそのまま動かなくなつたが頭は断末魔の叫びをあげた。  
暫く生きていそうだった。

…しかし、ケルベロスに踏み潰された。

## 正統継承者（後書き）

受験勉強があるので、たまにしか更新できませんが、これからもよろしくお願ひします！

## 強者の覚悟！（前書き）

更新が遅くなりました。

すみません。

週1ペースで更新していけたらと思っています。



## 強者の覚悟！

頭だけになった妖はゴキブリの如き生命力で生きていた。けど、ケルベロスが踏み潰した。

正直、気持ち悪かった。

生まれて初めて見た大量の鮮血。

妖が死んでやっとな気持ちに余裕が出来たのか罪悪感を吐き出す様に吐いた。

しかし、いくら吐こうとも罪悪感は拭い切れなかった…。

「殺す」ということの意味と責任。

敵とかどうとかの問題ではない、「死」というものに向き合う覚悟が俺にはなかった…。

「陰陽師」としての覚悟も…。

別に俺が直接殺したわけではない。けど、紫月に命令をしたのは俺だ。

『あんま、気にすんな…って言っても無理だろうから言わねえ。けど、アイツを殺ったのお前でも、俺でもねえ。』

ひでえ言い方かもしれねえが、殺ったのはケルベロスだ！』

俺の心を察してか、紫月が言ってきた。

『それに、そんなこと考えている暇があるならためえの親父の心配でもしてろ！』

そうだ、親父…親父は大丈夫なのか？

「父さん、大丈夫？」

俺は半ば叫ぶ様に親父に駆け寄った。

「あ、ああ…なんとかかな智樹こそ大丈夫か？」

「俺は大丈夫…だよ…父さんが無事…よかつ…た…」

俺はそのまま意識が途絶えた…。

父さんが俺になにか言っていたが、気にする余裕はもう俺にはなかった…。

—————

俺は差し込む日差しで目を覚ました。

ここは、俺の部屋…か？

「えーと、妖に父さんが襲われてて…俺が使鬼神を出して…えーと、それから…って今日学校じゃね？」

急いで居間に行った。

居間ではいつもの様に親父がテレビを見ながらお茶を飲んでいたり、まるで、昨日のことなんて何も無かったの様に、

「お、智樹起きたか？」

の一言。

これが強者の余裕ってやつなのか？

「俺、どれくらい寝てた？」

「そつだなあ、智樹が倒れたのが一昨日だから…1晩とまる1日かな？」

えっ！じゃ昨日のことじゃなくて、一昨日のことになるのか！

やべえ、中学校入学早々に休んだのか俺？

まあ、ほとんど知ってる奴ばっかだから別に浮いちゃうとかの心配はないけど。

俺の通っている北澤第二中学校は俺が通っていた小学校の奴らと周りの小人数の小学校が集まっているので、ほとんど知ってるんだ。

「学校行かないと！今何時？」

「今日はまだ安静にしてなさい！智樹、あなたは霊力が枯渇して倒れたのよ！」

ヤバイ母さんが怒ってる。

この状況で学校に行こうものなら……言い表せない。

「貴方もよ！昨日の夜まで智樹に霊力をほとんど休みなしで分けてたじゃない！」

まだ本調子じゃないんだから無理しないの！」

やっぱり、母は強しってことで誰も母さんには逆らえない。

「はい……」

2人ともそう言うしか…なかった。

「そんなことより、智樹あの使鬼神はなんだ？しかも、2体同時に召喚するなんて。あの2体、両方ともケルベロスと同等に近い強さだったぞ！」

ケルベロスと同等に近い強さだなんて、そりゃそんなの2体も召喚すれば俺の霊力が枯渇してもおかしくはないな。

『そのことについては、私からご説明いたしましょう』

いきなり俺の頭のなかに緑陽の声が響いた。

『智樹様、私の体を仔犬くらいのサイズのイメージで、具現化出来るギリギリの霊力に抑えて召喚して下さい』

あ、ああ。やってみるよ。

「汝、天照大神に仕えし光の守護神、緑陽！  
我の前に顕現せよ！」

居間のテーブルに緑色の小さな雷がおち小さな緑色の炎の中から小さな緑色の鹿が出て来た。

『それでは、私達の全てをご説明いたしましょう』

強者の覚悟！（後書き）

やっと、智樹の母親が出せました。

本当はもっと早い段階で出したかったんですが、なかなか機械がな  
くて…。

地道に更新して行くので、これからもよろしくお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5339y/>

---

今日から「お」のつく自営業？

2011年12月11日21時46分発行